

編集後記

大分以前に「胃と腸」編集会議に於てカルチノイド特集号の企画が提案されたが、稀有な腫瘍として本邦例は少なく、時期尚早であるとのことでみおくれたことがある。しかし、ここ2～3年間にカルチノイドの症例報告が急激に増加していることは確かである。その原因は臨床諸氏のこの腫瘍に対する関心のたかまったことにもよるが、それ以上に胃生検によって術前にカルチノイドの診断が可能となったことが大きく貢献しているものと思う。

本号では臨床診断、機能、病理及び実験面から総合的にカルチノイドの実体を詳述しているので、これによって読者はカルチノイドの何であるかを知ることが出来るものと考えている。

もし、主題の内容が多少難解で専門的にすぎると感じられたならば、それはカルチノイドについて尚、多くの未解決の問題が残されているからである。

カルチノイドは消化管ホルモン産生腫瘍の代表的なものとして、臨床及び病理の面から興味をつきない対象である。

日本に於ける消化器癌の研究が形態学的な面に偏りがちな現在、機能方面的の研究にも多くの関心を喚起させる動機となればカルチノイド特集号の目的はある程度果し得たものと考ええる。

早期胃癌の診断面で世界のリーダーシップをとった日本の臨床陣が、この方面でも是非リーダーシップをとって欲しいものである。

<佐野 量造>

<編集> 早期胃癌研究会